# 八丈島の猫学

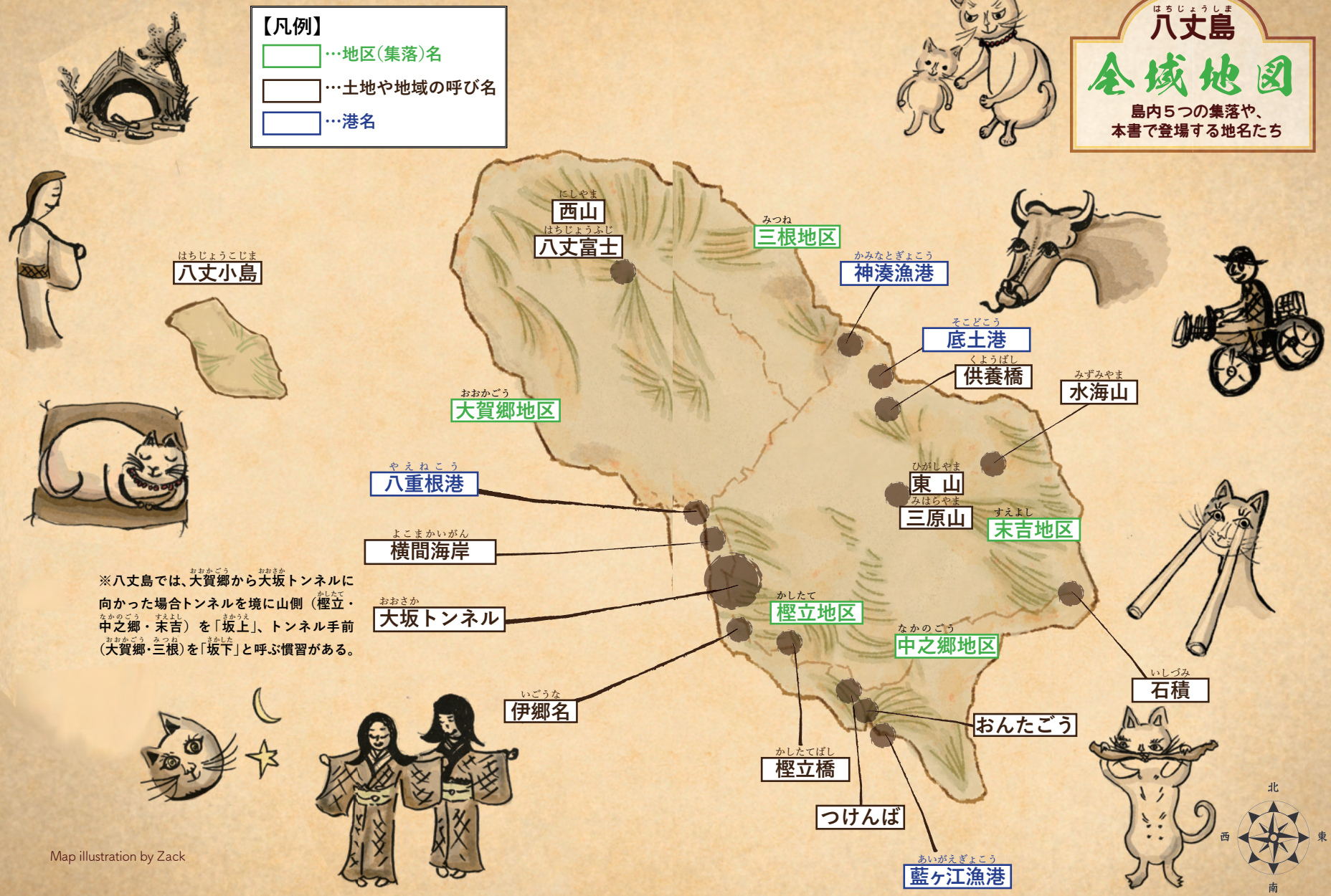
## なぜ猫は人を化かさなくなったのか？

福田 榮子　著

# 八丈島（はちじょうしま）
# 全域地図

島内５つの集落や、
本書で登場する地名たち

【凡例】
- …地区（集落）名
- …土地や地域の呼び名
- …港名




※八丈島では、大賀郷（おおかごう）から大坂（おおさか）トンネルに向かった場合トンネルを境に山側（樫立（かしたて）・中之郷（なかのごう）・末吉（すえよし））を「坂上（さかうえ）」、トンネル手前（大賀郷（おおかごう）・三根（みつね））を「坂下（さかした）」と呼ぶ慣習がある。

Map illustration by Zack

筆者の元原稿（一部）。ルーズリーフやノート紙、チラシの裏紙などに書かれた原稿はおよそ100片。びっしりと手書きされた原稿は、話のかたまりごとにまとめられ、付箋のタイトルらしきメモがついている。イラストは筆者が描きためてきたもの。本書では、これらのタイトルとイラストをできるかぎり採用した。

原稿はよく見ると鉛筆書きで何度も書き直した跡が見える。同一人物に対し聞き取り調査を何度か行った際に、内容の修正をしていることも。（上・右）

イラストは思いついたときに急いで描くこともあったらしく、裏紙を再利用した紙袋に描かれているものもあった。

編集者に修正指示を出す筆者。「死ぬまでに１冊は」と約２年の歳月をかけ、自身の考えをまとめあげた。

## 筆者プロフィール紹介

# 福田 榮子（えいこば）

愛称えいこば。昭和14(1939)年4月19日東京都八丈島八丈町中之郷の藍ヶ江で生まれる。約60年間でのべ10万人が訪れたともいわれる中之郷の民宿「ガーデン荘」を経営する、八丈島を代表する名物女将。エネルギッシュな話術と、島の豊かな海の幸で握った島寿司で、宿泊客に元気と安らぎを提供している。近年、猫の奥ゆかしい世界に興味を持ち、猫は「可愛さ」だけでなく、「深くて怪異的な力を持っている二面性のある生き物である」という考えのもと、八丈島出身かどうかを問わず「猫にだまされた話を聞いたことがないか」を、聞き取り調査している。

Portrait photography by Tomoco Tashiro
Interview/Text：Miyuki Yoshida

# 目次


序　えいこばあと猫、旅のはじまり（監修者序文）……9

第一章　「猫の王」との出会い……13

『猫の王』との出会い……14

私は猫ではない（筆者考察）……16

第二章　八丈島に伝わる猫の珍奇談……18

まっぴるまの出来事（筆者が記憶より考察）……19

炭小屋と猫（筆者が記憶より考察）……21

伊郷名の出来事（筆者が記憶より考察）……22

男が歩いた花の道（筆者が記憶より考察）……23

三歳の男の子がきえた（昔の噂話より）……24

赤子の泣くまね（明治生まれの筆者父、西条新平の話より考察）……26

東山のデッジメの話（明治生まれの菊池菊四郎の話より考察）……28

青ヶ島でも見た（昭和11年生まれ金田みさ子の話より考察）……29

おじいさんの話（昭和11年生まれの筆者姉・奥山菊美の話より筆者考察）……31

つけんば（昔の噂話より）……34

樫立橋（明治生まれの吉田オツヱの話より考察）……35

おんたごう（昔の噂話より考察）……36

水海山の出来事（昭和7年生まれ沖山美登子の話より考察）……38

迎えに行った中学生の子供（昭和14年生まれ川上絢子の話より考察）……39

緑の衣の女（約40年ほど前にあったとされる噂より考察）……40

魂をぬかれたのか（約40年ほど前にあったとされる噂より考察）……42

幻覚を見せたか（筆者考察）……44

石積（約40年前のつり客の話より考察）……46

いすの上の猫（筆者姉・奥山菊美から聴いた、菊美の同僚の話より考察）……47

車のライトの光（昭和11年生まれの筆者姉・奥山菊美の話より考察）……49

ある日の出来事（筆者姉・奥山菊美から聴いた、菊美の同僚の話より考察）……51

消えた食パン（筆者が記憶より考察）……52

実兄の話（筆者の兄の妻・西条由美子の話より考察）……54


本文イラスト：えいこば

第三章　なぜ猫は人を化かさなくなったのか？……57
猫をめぐる思索あれこれ（筆者考察）……58
第一話　猫の行動と体の不思議をめぐる推測……58
第二話　猫の日常についての考察……60
第三話　現代の家猫考……62
我が家の周りの猫のエピソード（筆者考察）……63
第一話　ネズミ出没……63
第二話　猫の目の変化……65
第三話　野ら猫……66
人を化かさなくなった猫（筆者考察）……68
第一話　昭和・平成・令和の時代の八丈島の猫の変化……68
第二話　猫の変幻のからくり……69
第三話　「ほじょ（魂を）ぬく」のは猫の天賦の才？……70
筆者あとがき……73
監修者解説……74

解説　立柳聡（文化人類学）
金田章宏（日本語学）



# 序

## えいこばあと猫、旅のはじまり

# えいこばあと猫、旅のはじまり（監修者序文）

立柳聡（文化人類学者）

２０１３年、我が家の二代目の猫である「みやあちゃん」を保護したのは、生まれて五日目のことでした。初代の猫である「のらちゃん」を飼ったことはあるものの、生まれて間もないこんなに小さな子猫を育てるのは初めてで、育て方をあれこれ学ぶことになりました。

こうなるともはや凝り性に火がついて、歴史、民俗、文学、法制、医療、社会問題……のらちゃんと一緒に暮らした時代以来、猫に因んだ本の読破が続き、将又、猫の写真展、絵画展などにも足しげく通うこととともなったのでした。

それにしても自分の専門から、やはり強く興味をひかれたのは、ネコに関する民俗や人間との関わりの歴史といったところでした。こうした状況の下で、ひも解くことになった本の一つが、小島瓔禮の『猫の王　猫はなぜ突然姿を消すのか』（小学館，1998，小島瓔禮著）でした。

猫の民俗や歴史に関する知見を集めた秀作の一つであるこの本を読み進める中で気づかされたのは、八丈島の猫に関する記述が間々登場することでした。そういうものか……と、興味をひかれながら気づいたのは、既に30年以上も八丈島に通い、民俗や歴史、社会構造に関する調査に従事してきたというのに、こうした話を聞いた覚えがないことでした。〝本当に、なのだろうか……？　これはやっぱり栄子婆に一度聞いてみることにしよう！〟そういう思いに至ったのでした。

ここから先の後日談は、栄子婆が記している通りなので割愛しますが、自分でもさらに調査してみると、たとえば、浅沼良次の『新版　日本の民話40　八丈島の民話』（未来社，1965，浅沼良次編）の中にも、当該の話が複数掲載されていることに気が付きました。これらを伝えた人物には近藤富蔵もおり、八丈島における猫に関する伝承の歴史は、少なくとも江戸の昔にも遡り、また、栄子婆が暮らす中之郷地区の人々の名前も複数登場していて、しかも、栄子婆に聞くと、旧知の方々であるとのことから、八丈島の猫に関する言い伝えがにわかに身近な関心事として浮上することになったのでした。

こうなると知る人ぞ知る栄子婆の行動力は一挙に起動し、次々と稀有な言い伝えが集められることになったのです。その成果がこうして本になり、多くの方々に読んでいただけることをとてもうれしく思います。八丈島の民俗、歴史、猫について、関心を深めていただけたら、幸いに思います。

一方、時代の移り変わりと共に、八丈島における猫と人間の関係も少しずつ変わってきました。保護猫問題、虐待事案の発生など、猫をめぐる全国一般の動向は、八丈島もまた無縁ではありません。

八丈島の人々と古くから関わり、鼠を駆除して活躍したり、いつの頃からか人々の精神に入り込み、様々な伝承を生み出して、八丈島の民俗形成にも寄与してきた猫のことを思うと、幸せに生きてほしいと願うばかりです。

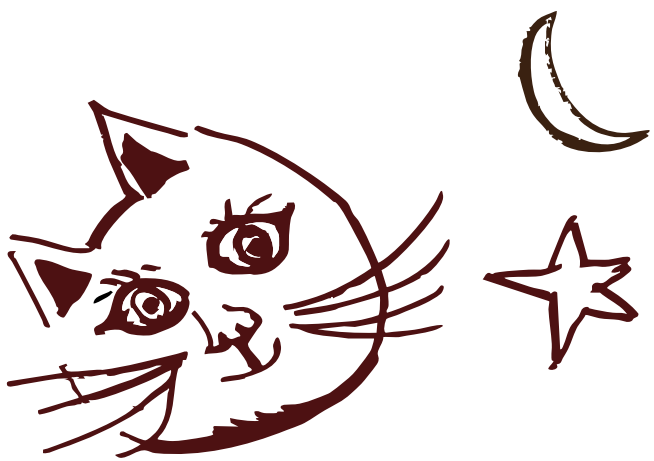
そして本書を通して、猫と人間との共生について考え、その実現や充実のために行動してくださる方々が増えることを期待したいと思います。

（令和七年七月吉日）



# 第一章

# 「猫の王」との出会い



**本章ではまず、筆者がなぜこの本を書くことになったのかその経緯を説明しておく。同じように、猫についての不思議に興味を持っていただけるよう祈る。**

（編集注：聞き取り調査は２０２３（令和５）年頃に行ったものであり、「今」と記載している場合多くはこの年のことである。また、「私」という一人称記載のほとんどは筆者自身のことだが、聞き取り調査対象（話者）が自らを語っていることもあるので、その場合はできるかぎり分かりやすく注記した。）

## 『猫の王』との出会い

福島県医科大学で教授をしている立柳聡先生が、文化人類学の研究調査のために八丈をたびたび訪れている。先生は私の家（民宿ガーデン荘）を常宿にして30年以上通っている。その先生から２０２３年4月29日と30日の予約の電話があった。その時、八丈島の面白い話が載っている本があるので持っていく、楽しみにしていて、でも、えいこばは知っている話かも知れない、と言っておられた。29日夕方宿に着き、夕食の後八丈島のことが書いてあるページをコピーして持って来てくれた。この本を買って読んだほうがいいよ、とその時言われた。題名は『猫の王　猫はなぜ突然姿を消すのか』（小学館,1998,小島瓔禮著）。そこで出会ったのである。注文して一週間後に届いた分厚い本には世界や日本各地の猫の情報が書かれていた。

『八丈島の民話　日本の民話40』（未来社,1965,浅沼良次編）、この本との出会いもまた、立柳先生が一ヶ月半ぶりに来島した折に持って来たものである。八丈民話という本があることは知っていたのだが、買って読むほどにはいたらなかった。開いてみると昭和40年以前に島全体の人たちから聞いた話が載っている。話をしてくださった人たちは当時70～85才で、知った人も多かった。

（ほかにもあるのだが）最も興味のある猫の話が書いてあるページに的を絞ってみると、昔の話で「テンジと山番」「女に化けた猫」「化猫退治」「猫の恩がえし」の四話があった。その中の「テンジと山番」という話をして掲載されていたのが、おどろくことに夫のおばあさん（中之郷の菊池青梅）なのだ。黄八丈の織物が大変上手な方で亡くなるまで元気に織っていた。今も写真がある。また、「女に化けた猫の話」は私の生まれた藍ヶ江で、窓を開けて手を伸ばすとものが取れるぐらいくっついていた

隣の家のおばあさんの話で、これもまたびっくりたまげた。さらに、子供の頃近くに住んで日々顔を合わせていたおじいさんおばあさん達五、六人が他の話をしているのだが、みんな昔の話として始まっているのが気になる。昔とは、いつ頃の話であろうか。明治・大正、それ以前か。

**私は猫ではない（筆者考察）**

八丈島であった昔の猫の話は大抵が２００～２５０年前のことである。猫に子供や赤子をさらわれそうになった、さらわれた、たぶらかされた、などの話は書物で読んだことがある。これらは私は実話だと思う。今年（令和５年）の四月に『猫の王』という本に出会った。その本の第四章には、八丈島の猫の話が多く書かれていて、興味深い。そこでふと気がついたのが、「猫に騙（だま）される話はいつ頃から無くなったのか」ということである。過去、１００年前頃から現在に至るまで、猫に赤子をさらわれていた、たぶらかされた話が書かれている本を私は知らない。

そこで近くに住んでいる、75～90歳ぐらいの人達に話を聞いてみることにした。実際に遭遇（そうぐう）した人、騙された人の話が次々と出てきた。これは面白いと考え、書きとめ始めたのであるが、私には夢の中の出来事としか思えないような話の数々にあぜんとするのである。これらの聴き取った話から分析するに、猫が生む怪異（かいい）現象とは、「猫が生き長らえ、老いて学んだ『人との関係』に執着した猫が、ある種の別の世界（それはあの世とよばれている所かもしれない）の映像を目の前にうつし出し、人を錯覚させ、人を思いのままに行動させていること」なのではないか。言葉にするのは難しいが、魔性（ましょう）という言葉しかあてはまらないのであれば、人の知恵では理解するのは、当然難しいことかも知れない。

# 第二章

# 八丈島に伝わる猫の珍奇談

本章は、筆者が記憶しているもしくは八丈の島人から伝聞した「猫に化かされた」経験談をまとめた章である。次々に出てくる猫による怪異体験。まるで、夢の中の話である。しかし、記録を続けていくうちに、本当にあった出来事だと思うようになっていく……。確かに、現代の一般的な猫像と、調査、聴き取りした際にとびだす猫像は大きく異なるが、私の一番の関心事は「なぜ猫が人を化かすのか」ということである。

**まっぴるまの出来事（筆者が記憶より考察）**

120年ほど前であろうか。この話は私の母が病気がちで、子供の頃じいさんばあさんと一緒に住んでいた時に聞いた話である。ばあさんの家から坂を少しくだった所にばあさんの姉の家がある。

まっぴるま、その姉の家へ行こうと思い、糸束を持って、新しい着物の柄を考えながら歩いていた。ふと、柄をこうしよう！　と考えが浮び、我にかえった時、自分の目の前を猫が木の枝をくわえ、両手をそえてとことこと歩いて行くのだ。あれ、こい

つめと思い、「ウンガ　オドリョワ　ミタクナッキャ。ウヌン　バカン　サレロ　ワケニワ　イキンナコダラ。ウヌト　トアブレテ　アロ　ヒマワ　アレニャ　ナッキャ。（訳：おまえの踊りは見たくない。おまえに馬鹿にされるわけにはいかないんだ。おまえと戯れている暇は私にはない）」と言いながら、下に落ちていた木の枝を猫にむかって投げた。すると猫は、大きな声でニャーとなきながら逃げていった。

ばあさんは私と姉に対し「テントーサマガ　ウェンダニ　アロ　トキモ　ネッコメワ　ヒトー　ダマクラセロンテ　キョ　ツケロダラ。（訳：太陽が上にある時も猫は人をだますから気をつけるんだよ）」と話した。青ケ島でも昼間堂々と変貌した姿を見せる事例がある。



## 炭小屋と猫（筆者が記憶より考察）

八丈島では明治30年頃、椿、サカキ、桜、ヤマモモを使って炭焼きが始まった。大正9年には木炭同業組合も設立され、日本各地に出荷された。第二次世界大戦終了後はいち早く着手して日本各地に出荷されたようだ。中之郷藍ケ江港はその時使用された港で、数少ない八丈島の産業の一端を担っていた。

その炭を焼く小屋は山の奥深くではなく、里に近い場所に数多く点在していたのである。その小屋から大きな猫がとびだし、度肝を抜かれた話が数多く残っている。小屋は屋根があり、窯の中は炭のおかげで湿気も少なく、かっこうの寝ぐらだったのではと思うのである。

現代は炭小屋が失われ、猫の棲み処もその数をぐんと減らしてしまったため、現在の我々が猫に化かされなくなったのも無理のない話なのかもしれない。

# 監修者解説　八丈島の人々と猫

立柳聡（文化人類学・八丈島の文化、社会研究）

そもそも八丈島の人々、もしくは日本人一般に、猫とどのように付き合ってきたのだろうか。そして、猫という生き物をどのような存在として捉えてきたのだろうか？「序」の記述や後述のように、八丈島における猫の奇話や珍談などの民話は、江戸時代には語られていたとみられるから、そこに盛り込まれた猫のイメージは、それ以前の歴史を踏まえて概ね形成されたと考えられよう。先行研究を紐解きながらそのあたりまでを振り返ると共に、現在の八丈島の人々にとって、猫はどんな存在なのか、筆者の聞き書きも踏まえて考察してみたい。

## Ⅰ　猫と日本人との関わりの歴史の素描

まず猫に関する伝承を中心に、その歴史や生態、保護に至るまで、幅広く網羅した内容によって、「猫の宝典」とも呼ばれる猫にまつわる研究の名著として名高い平岩米吉の『猫の歴史と奇話　新装版』（築地書館，1992，平岩米吉著：16-17p，24p，31-32p）によって振り返ってみよう。

「『源氏物語』では、「若菜」の巻に、まだ幼い唐猫が、少し大きい猫に追われて御簾のなかから走り出してくるところがあるが、…当時、猫が数多く飼われていたことも述べられている…」

「藤原定家の日記『明月記』には、承元元年（1207）七月四日の項に、愛猫を放し飼いの犬にかみ殺されたことが記されている。妻が三年ほど前から飼った猫をともに愛するようになり、懐に入れたりしたのを急に失ってひどく悲しんだらしい。「悲慟之思、人倫に異ならず」と書いている。」

「…御伽草子の一種に『猫の草紙』があり、巻頭に「天下太平国土安穏」を祝ったのち、慶長七年八月中旬（1602年）のこととして、奉行が一条の辻に高札を立て、猫を縛るのを禁じたことが記されている。」

「『西鶴織留』巻三（元禄七年刊・1694年）には、江戸の猫の蚤取りを世過ぎとする男があったことが記されている。…」

「越谷吾山の『物類称呼』（1775 年）には、短尾の猫を「かぶ猫」「牛蒡尻」「五部尻」などと呼ぶ方言があげられ、また田宮仲宜の『愚雑俎』（1825 ～ 33 年刊）には、京都では尾の長い唐猫を飼う者が多く、浪華では尾の短い和種を飼うものが多いと述べられている。」

「菅江真澄の『筆のまにまに』第二巻（文政六年・1823 年執筆）には、鎌倉時代終期（徳治元年～延慶元年・1306 ～ 8 年）鼠の害から書物を守るために送られてきた唐猫は、「みな尾短く形も長からず」三毛斑などもあったと記されている。」

次に、近現代史の中の猫のあり方を追わねば、現在の人間と猫との関係がどのような歴史的経緯のもとで形づくられてきたか知ることができないとの問題関心を踏まえ、明治時代以降を本格的な対象に捉えた猫の歴史に関してまとめられた貴重な書籍である真辺将之の『猫が歩いた近現代』（吉川弘文館 ,2021, 真辺将之著 :2-3p, 6-12p）を参照してみよう。

真辺は、明治維新からしばらくの時期は、猫にとってはいまだ近代以前の「前近代」の生活が続いていたと捉え、「前史」として、江戸時代後期から明治中期頃までの「近代以前」の猫の置かれた状況を描くために一章を割いている。特に江戸時代の状況をめぐっては、近年の「江戸の猫ブーム」という言説に留意し、三つの観点から、その検証を試みている。

一つは、猫好きの作家、歌川国芳に代表される猫の浮世絵の人気である。これをめぐっては、国芳の絵の人気は、猫を描いたからではなく、国芳ならではの意匠によって、世を驚かし、おもしろいと思わせたところにあると指摘している。

二つめに、「鼠除けの猫絵」に注目しているが、この絵は、ネズミ除けの一種のまじないが目的であって、猫そのものが愛らしいから飾っているのではないと明らかにしている。

三つ目に、招き猫が検討の俎上に載せられるが、猫から派生した商品ではあるが、一種のお守り的な人形ないし置物が本質と考える旨が記されている。

そのうえで、「江戸の猫ブーム」としての捉え方は、「現在の人間と猫の関係ないしは願望を過去に投影した」見方であると論じている。

最後に、猫の人気は千年以上も前から続いており、猫は愛玩されるだけでなく、人々の生活に不可欠なものであったことを論じた渋谷申博の『猫の日本史　みんな猫が好きだった』（出版芸術社 , 2022, 渋谷申博著 :16-21p,24p,29p,32-34p, 36-37p, 47p, 74-75p, 80p）によって確認してみよう。

「長崎県壱岐カラカミ遺跡で平成十七（2005）から平成二十三年（2011）にわ

## ■監修者プロフィール

### ●立柳 聡（文化人類学・民俗学監修）

たちやなぎ・さとし。1959 年生まれ。社会学博士。2025 年 3 月福島県立医科大学を定年退職後同大学医学部非常勤講師並びに総合科学教育研究センター博士研究員。この間、島嶼コミュニティ学会総括理事などを歴任。日本を中心に東アジアをフィールドとして文化人類学の立場から、畑作農耕文化・社会や日本文化・社会の地域性研究が専門。

### ●金田章宏（八丈語中之郷方言監修）

かねだ・あきひろ。1955 年生まれ。日本語学（文法）の研究者。千葉大学大学院国際学術研究院名誉教授。第 30 回金田一京助博士記念賞受賞（『八丈方言動詞の基礎研究』に対して）。研究対象は八丈語三根方言、琉球宮古語大神島方言、琉球八重山語西表島方言、山形南陽方言等の形態論。

**■取材協力**

うみ動物病院
島猫ニャンとかする会

**■資料提供／協力**

南海タイムス社
八丈町立図書館

**■取材・編集支援**

杳 芽具見様／橘樹 纂史様
ゆる民俗学ラジオ
サポーターコミュニティ「壁」の皆様

**■編集補佐／地図イラスト**

ザック

**■取材協力／カメラ**

田代倫子（OCTOWORKS）

**■編集／デザイン／ DTP**

あだん堂

**■参考文献**

『猫の王　猫はなぜ突然姿を消すのか』（小学館 ,1999, 小島瓔禮著）
『猫の民俗学 増補』（田畑書店 ,1979, 大木卓著）
『八丈島の民話　日本の民話 40』（未来社 ,1965, 浅沼良次編）
『ネコ学 : あなたの猫と最高のコミュニケーションをとる方法』（築地書館 ,2024, クレア・ベサント著／三木直子訳）

## 編集後記

本書は、筆者の手書き原稿（草案）をもとに、筆者を取材しながらできる限り筆者の考えを書き起こし一冊にまとめようと試みたものである（筆者の記憶を頼りにできる限り取材先話者名や年代を記載するよう心がけたが、筆者の記憶・考察・推測は「歴史的・科学的事実」と必ずしも整合できない可能性もある）。くわえて、筆者の手書き原稿を読んだときに感じる「読み味」や「あたたかみ」、また「八丈島の当時の営みが見える文」をできる限りいかせるよう、表記統一などの厳密な編集作業を行わず、書籍化にあたり最低限必要な編集を加えるにとどめ、読者のかたがたの錯誤を誘いそうな部分のみ補足・編集注釈を積極的に付け加えることとした。

原稿の掲載順序については、立柳 聡教授のご助言をいただきながら整理、編纂した。さらに、八丈語（八丈島方言）が登場する箇所は、金田章宏教授にご助力いただき、方言表現登場直後に現代語の対訳を付けた。御二方のお力添えに、心より厚く御礼申し上げます。

編集担当／あだん堂 代表　吉田美幸 記

なぜ猫は人を化かさなくなったのか？

# 八丈島の猫学

令和七年九月十日　第一版発行

著者　福田（ふくだ）　榮子（えいこ）

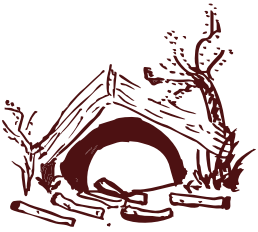
発行　合同会社つばくら文藝企画
万年筆文芸部

発行所　ガーデン荘
東京都八丈島八丈町中之郷三三七六
お問い合わせ・〇四九九六（七）〇〇一四

編集　あだん堂
お問い合わせ・ojare8jo@gmail.com

●本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
●乱丁落丁の場合お取替え致します。着払いにてガーデン荘に送付ください。

印刷・製本　株式会社グラフィック

©2025 Eiko Fukuda All rights reserved , Printed in Japan

ISBN 978-4-910368-04-7